



世界に届け甲陵愛 本校のユニセフ委員会の活動

報告者 兵庫県西宮市立甲陵中学校 教頭 藤井 康弘先生

1. 活動のポイント

本校が20年近く取り組んでいるユニセフ委員会の活動は、現在では、アルミ缶回収を通じて、フィリピンに12基の井戸を贈ることができている。そもそも、この活動がはじまったのは、「水問題は世界規模であり、今私たちが、身近でできることはないだろうか?」と考え

- ① 日々の生活で、水道の蛇口から水を出しつぱなしにしない。
- ② 給食を粗末にしない。
- ③ アルミ缶回収に協力。

これらのことから、生徒会として、全校生に呼びかけ、アルミ缶回収が始まった。

このアルミ缶回収を通じて、「井戸を贈る」という目標達成はもちろんであるが、環境問題を考えることにもつながっている。クラス全員が、また、全校生が一つのことに向かって取り組むという本校のよき伝統となることを期待している。

2. 実 践

(1) 委員会活動

4月、新入生を迎える対面式で、生徒会活動の紹介のなかで、アルミ缶回収の方法を説明するだけではなく、環境問題にも触れ、水不足に悩む人たちへ我々のできることは何なのかを訴え、寸劇を交えた説明で新入生にも呼びかけている。

回収状態が思わしくないときは、全校集会で、スライドショーなどを用いて、全校生に呼びかけている。

冬には、年賀状などの書き損じたはがきを回収する取り組みも行っている。

(2) アルミ缶回収

アルミ缶回収は、毎週水曜日の朝行っている。前日の給食時の放送で呼びかけをし、当日の朝は、アルミ缶の入った袋を持って生徒が登校。各クラスのユニセフ委員が、持参した生徒のクラスを控え回収を行う。毎回、平均にして約2500個は集まっている。そして、1年で1基の井戸を贈れるようにと考えている。本校の取り組みは、地域のコミュニティー誌にも取り上げられた。また、地域の方からもご理解をいただき、老人会で行ったアルミ缶回収の収益金を寄付していただいたこともある。



水曜日の朝の回収の様子

(3) アルミ缶回収を通じて

- ① 限られた人だけでできる活動ではない。
- ② 困っている人を助けたいという気持ちが大切。
- ③ 多くの人が協力してくれることに意義のある活動である。
- ④ 捲った缶でも参加できる。誰もが参加できる取り組みである。
- ⑤ アルミ缶1個でも大きな力になる。

これらのこととを常に呼びかけていることで、環境問題や仲間が協力することの大切さ、何かに向かって頑張る集団の意義についても考えるきっかけになっている。

生徒会ユニセフ委員長の思い

甲陵中学校では、毎週水曜日の朝、アルミ缶回収を行っています。フィリピンに井戸を送るという目標に向かって、甲陵中生一丸となって取り組んでいます。強制参加ではなく、自主参加としてこの活動をしていますが、たった1回の回収で3000個集まるときもあります。

しかし、だんだんと参加人数が減ってきてるのが現状です。中には、毎週参加の人もいますが、一方で、一度も持ってきたことのない人もいて、意識の差が大きくあります。

1992年から始まる甲陵中学校のすばらしい伝統の一つである、アルミ缶回収を今、さらにレベルアップした伝統にするために、生徒会やユニセフ委員会は呼びかけをしたり、スライドショーをしたりして、意識向上に努めています。

第13基目となる井戸を送るために今後も頑張っていこうと思います。

2009.5

3. 成果と課題

- (1) この取り組みを通じて、環境問題を考えること、私たちの生活を振り返ることにもつながっており、生徒の自信となることを願っている。
- (2) 個人の参加ではなく、クラスの取り組みとして、協力することや、集団としての意識の向上も期待している。
- (3) ユニセフ活動に興味関心を持ち、この経験を生かし、さらなる活動の広がりを願っている。



贈った井戸はこのような写真で、紹介していただいている。

生徒会が作成した、アルミ缶回収を呼びかけるスライドショーの最後は、こんな言葉でしめくくられています。

「私たちは物に溢れ、恵まれた国に生まれました。」

「水不足なんて、自分には関係ない。誰かがやったらしい……」

「その気持ちは、同じ地球に生まれた人間として無責任だと思いませんか？」

「誰かが幸せになれるのなら……」

「自分も幸せになれると思いませんか？」

「未来を創っていくのは私たちなのですから……」